筆山

第41号／2006年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲（41回）

編集室：〒106-0032 港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 編集委員 鶴和千秋（41回）
TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail:tsuruwa@rsg.gr.jp

関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/

8月27日大勢の観客に囲まれて原宿表参道ストリートを演舞する高知チーム「ほにや」（写真提供：欅会）

「よさこい」が繋ぐ縁（えにし）

角 陽一郎（72回生）

ご存知でしょうか。東京・原宿表参道が、毎年8月末になると、高知の「よさこい」一色に染まることを。

その名は「原宿表参道元氣祭スーパーよさこい」。この祭は、原宿表参道の商店街組合と、高知のよさこい関係者、それから私のような高知出身の東京在住者等によって開催されています。高知チーム群の演舞や、高知物産展、「本場高知」を強調する司会者等、まるで高知のPRイベントかのような会場の雰囲気をご存知の方も多いと思います。

首都圏でここまで高知の存在を知らしめられる場というのは他にはありません。これを可能にしているのは、我々高知出身の人間の関わりだけでなく、地元の商店街、原宿表参道欅会の高知に対する懐の深い理解と愛着に拠るところです。

欅会の皆さんは、毎年高知よさこい祭りに視察に訪れ、地元関係者との交流も深めており、夏前になると、「今年の『ゑびしば』は～」、「『帯屋町』は～」など、本当に高知にいるかと錯覚するような会話が飛び交います。

そればかりか、先日高新の記事にもなりましたが、この祭を通じて、表参道と高知の間でいくつものビジネス交流も生まれています。それもこれも、「よさこい発祥の地」である高知に対する関心と、血の通った交流の中で生まれた信頼に拠るところで、人によっては「第二の故郷みたいだ」とまでおっしゃいます。

この事実をもっともっと高知県人に知ってほしい。海外ブランドも立ち並び、東京の中でも有数の商業圏である表参道の商店街の中心人物たちがこぞって高知を訪れ、土佐人と酒を酌み交わしては親交を深め、高知の未来、よさこいの未来を共に語る。祭の立ち上げから6年、今や当たり前の光景になりました。正直、彼らによってあらためて高知の魅力に気付かされたのも事実です。私はこの「よさこい」がもたらした、街と街との「縁（えにし）」とも言うべき繋がりを、これからも大切にし、このことがいずれ高知の経済発展、観光振興に結実していくことを願っています。

（㈱ハッピータウン・ラボ代表取締役。「原宿表参道元氣祭スーパーよさこい」の事務局運営、イベント作成・運営を担当）

関東支部活動報告

事務局長　二宮　潔（49回）

関東地方も漸く秋らしくなって来ました。同窓生の皆様には、お変わり無く健やかに、実りの秋本番をお迎えのことと存じます（いや本誌発送の頃には、とうに師走かな？）。

さて、今年の関東支部の活動は1月23日例年通り筆山会の新年会からスタート。長らく会長の重責を担って頂いた吉澤信一さん（16回）に代わり、岡崎昌生さん（23回）が新会長、山本高敬さん（25回）が副会長にそれぞれ就任されました。

続いて2月18日の学年幹事会で今年度の活動方針を確認し、6月10日には恒例の大イベント「関東支部総会・大懇親会」を東海大学校友会館（霞ヶ関ビル）にて開催。今年の世話役「下1桁6の回生」の企画・進行は36回生のリーダーシップよろしく、例年にも増して卓越したチームワークによる見事な内容で、参加した三百余名の同窓生を唸らせました。来年（6月2日）は新装なった三菱クラブ（丸ビル）に会場を移し、バトンタッチを受けた「7の回生」が、既に準備に入るという気合の入れようで、まっこと楽しみです。

また、今年もガーナよさこい支援会（古谷俊夫会長）の肝煎で、ガーナの名門アチモタ高校を中心とする20名のガーナ高校生が来日、8月26・27日の両日、原宿・表参道での「スーパーよさこい祭り」に参加しました。今回はガーナの高校生と麻布学園、女子学院、土佐高校の4校の生徒が中心となり、ガーナチョコでお馴染みの株式会社ロッテのご協力のもと約百名の「ロッテ・ガーナよさこい連」を結成し、関東支部のはちきん有志の友情参加を得て、これまた素晴らしいチームワークを発揮しました。その後、ガーナの高校生たちは高知へ向かい、橋本高知県知事を表敬訪問、土佐高校での授業参加や、ホームステイも体験し、大満足で9月5日帰国の途につきました。

相変わらず、関東支部ではニュースに事欠きません。4月には高松市観光大使の萩野友康さん（44回生）が6年ぶりに東京転勤され「一木会」に復帰。9月16～17日は37・38回生を中心に老若男女29名による第10回土佐ハイクの会が実施され、白馬・八方池へ。不参加だった私も千円の「記念Tシャツ」を買ってパジャマにしました、ハイ。

9月30日には佐々木泰子さん（33回生・関東支部副幹事長）の双子のお嬢さん「たまりの一」さんのコンサートが銀座ヤマハホールで開かれ、関東支部の長老方も駆けつけホールは満席。このコンサート、前売券も早々に完売じゃった。私も次回は必ず聴きに行こうっと。

同じく9月30日は昨年設立された北海道支部（37回生田原支部長・38回生窪田幹事長）の第2回総会に、関東支部から友情参加の38回生4名を含む6名が参加、翌日の第1回向陽会コンペも大盛況。

10月4日は三菱クラブ（上述）で久々に「バラの木会」も開かれ、22回生から57回生までアブラ売り（石油産業）にゆかりのある面々が集い、大いに盛り上がりました。目下、安倍新政権にて初入閣を果たされた山本有二さん（46回生）の「お祝い一木会」を待つばかりです。いづれ詳しくは関東支部HPをご覧下さい。

なお、今年前半において特に印象深い出来事の一つに、昨年末から半年余りに渉った80回生の戸田浩司君支援、並びに骨髄バンク8万人登録運動（継続中）があります。その一端は既に筆山40号でご紹介しましたが、拙稿提出後、間もなく戸田君の元気な生還が実現したことは、何よりも悦ばしく感動的なことでした。8月12日の本部総会における戸田君父子の嬉しいご報告とご挨拶は、参加者みんなの胸を熱くさせてくれました。感動をありがとう。そして戸田君の今後の順調な経過を願うと共に、一日も早い復学と将来の教師としての旅立ちを心待ちにしております。併せて、支援運動に協力して下さったスーパーバンドのメジャーデビュー（日本ビクター）にも大いなる成功のエールを送りたいと思います。

末筆ながら、皆様の益々のご健勝と母校の新校舎建設ほか創立百周年記念事業の着実な前進を祈念し、今回の支部報告と致します。

（06年10月6日）

母校だより

学校長　池上武雄（28回生）

関東支部の皆様にはお変りなくご清勝のこととお慶び申し上げます。いつも母校に熱い思いとご支援を賜わり有難く厚く御礼申しあげます。

○履修漏れ問題について

今回進学校を中心として全国で発生しました履修漏れ問題につきましては、本校に於いても数科目の履修漏れを発表し多くの指弾を受けたところです。カリキュラム作成については全て校長の責任であり誠に申訳なく心からお詫びを申しあげます。問題発生時から生徒や保護者の皆様に不安やご心配をお掛けしたことをお詫び申しあげますとともに、関係官庁のご指導のもと高3生への補習や、高2、高1生へのカリキュラム変更などを説明し理解と安心をいただくべく全力を尽しておるところでございます。高3生への補習につきましては、目前に大学入試を控えているところでもあり、センター試験や大学入試に影響のないよう最大限の配慮を考えました。幸い文科省の救済案も出され本校でも問題なく処理できるも

のと考えております。全員未修の「情報」に関しては、高知工科大学のご好意により42回生の島村和典教授やお子様が中学に在籍の岩田誠教授に特別講演をお願いしご協力をいただけることとなりました。

本校としては従来から中高一貫教育を標榜し、高校での学習を中学で先行習得する在り方が一変して否定される事態に大きな戸惑いと残念な思いを感じているところです。

ただ法を守ることへの言訳はできません。生徒に学ばせるべきものはきちんと学ばせる方向の上に進学校としてより一層の内容の向上をはかりたいと考えております。

○新校舎建築プロジェクトの推進（設計業者選定まで）

7月13日の評議員会、理事会でＣＭ会社最終選考に残った3社の中から株式会社三菱地所設計様とのＣＭ契約締結を承認いただきました。以降同社のアドバイスを受けながら設計業者の選定作業を進めました。7月31日に設計の公募要領を公表、8月24日の応募締切時点で5つの設計共同体から応募がありました。厳正審査の結果3共同体に絞って第二次審査の設計提案書提出をお願いいたしました。その後ヒアリングも実施し10月6日の理事会で安井建築設計事務所・西森建築設計ＪＶ様を最優秀応募者として承認いただき、11月1日川崎幾三郎理事長出席のもと契約締結を行ないました。安井建築設計ＪＶが最優秀と評価されたのは、設計力のレベルの高さによるもので、特に地震対策、校舎の全体的配置と近隣への配慮、建替え手順等の面で優れた点が認められたからです。（本校ホームページに外観イメージ等を載せておりますのでぜひご覧下さい。）今後は先生方に意見を出していただき細部を詰めて、これからの50年間土佐の教育を支え得る立派な校舎にしたいものと考えております。今後のスケジュールとしては、設計業務終了平成19年3月末、長浜グラウンド（高校野球、サッカー練習場）完成平成19年3月末、工事発注・着工平成19年7月末、工事完成平成21年8月末を予定しています。併せて建築資金募金運動の再出発についても検討が進められておりますので近々に皆様へ募金のお願いもさせていただく予定でございます。その際には何とぞご協力の程お願い申しあげます。寒さに向う折柄皆様のご健勝、ご活躍を祈念申しあげ報告とさせていただきます。

（11月立冬）

本部だより

幹事長　安岡範悦（39回生）

関東支部の皆さんにはお元気でご活躍の事と存じます。また日頃は同窓会活動の中心支部としてご協力頂き厚くお礼を申し上げます。同窓会本部の活動に付きましては10月発送の会報誌「向陽」でご報告致しましたのでご一読をお願い致します。

実は平成16年1月31日土佐高校79回生卒業式に出席するにあたり、宮地会長の代行として祝辞を述べよとのご指示がありました。元より浅学非才であり教訓めいたお話は出来ません。ただ日頃思う所感を申し上げ、卒業生へのお願いの言葉としましたのでご報告致します。

卒業生の皆さん、御父兄の皆さん、そして校長先生をはじめとする教職員の皆さん本日はおめでとうございます。

私も40年前に皆さんと同じように今日を迎え、その6年前に土佐中学に入学しましたので、46年間土佐中・高校を身近に感じてきました。当時の土佐中・高校には「学問とスポーツの両立」と言う事は勿論ですが、もう一つ「どんな道へ進もうともその分野でひとかどの人物であれ」という校風・風土がありました。

当時、有名な名物先生は授業の中で、「真に実力あるある者は私学へ行け、実力なく学校の名前で生きたいものは帝国大学へ行け」と檄を飛ばされていました。

決して、ご自分が私学の出身だから私学を推薦したわけでなく、また帝国大学を誹謗、中傷したのではありません。「自らが選んだ道を自分の力ですすみ、その道でひとかどの人物になろうとする勇気をもつこと」を進められたのだと思います。

今、土佐高の卒業生は皆さんを含め約一七〇〇〇名になると承知しています。その先輩の活躍の場は国の内外を問わず、また国内においても都市部、地方、大企業、中小企業のあらゆる業種に至っており、活躍の幅の広さと深さは他校の追随を許さないと自負しています。

例をあげれば34回　尾池和夫さんはこの程京都大学総長に就任され、35回　浅井和子さんは遥かアフリカの地でガーナ大使として活躍されており、40回　岡上功さんはＦ１グランプリの強豪チーム、マクラーレンチームの無線通信担当のスペシャリストとして優勝に貢献、41回　杉山雄一さんは医薬会のノーベル賞とも言われる「米薬学賞」を世界ではじめて米国人以外の受賞者となられ、48回　上治堂司さんはゴックン馬路村の村長としてユニークな経営で土佐の小さな村を今では全国から注目される有名な村にされています。51回　浜田知佐さんは昨年度のソムリエ日本一を獲得されるなど、まさにあらゆるジャンルでひとかどの人物として活躍される先輩は枚挙に暇がありません。

同窓会には本部組織のほか関東、東海、関西、広島、香川の各支部がありホームページや機関紙であらゆる行事のご案内をし、会合を持っています。いろんな機会を通じ先輩とも交流を深める中「いずこの道へ進まれようと、それぞれの分野でキラリと光る、稟としたひとかどの人物として活躍される事を期待しています。結びにあたり42回生の堀見淳二さんが関東支部の会報紙「筆山」に寄せられた文

の一部をご紹介し御挨拶とします。

私共の共通点は「青春」を土佐中・高で過ごしたと言う一点である。その一点がこれだけの仲間を創り、お互いに共感できる環境を育ててくれた。その「土佐高魂」を支え続けてくれた諸先輩には本当に感謝したい。そして我々はその「土佐高魂」を発露し続けてゆきたいし、また後輩もその伝統を守り続けてもらいたい。最後に私の好きな俳人に山頭火がいる。厳しい社会状況だけど、人生には青々と茂る森がある事を信じて、

わけ入っても
わけ入っても 青い山

時あたかも新校舎建築設計提案者が決まり、今後基本設計、実施設計と設計業務が進められようとしています。今次改築は耐震問題のみならず、まさに「21世紀における土佐高の教育活動の土台となるもの」と位置付けられ、他県、他校の調査結果や教職員の意見が反映された新校舎だと考えます。

近々、母校改築のため同窓会も「募金活動」を開始する事になりますが金額の如何を問わず出来るだけ多くの同窓生が「土佐高魂」を発揮して頂きご協力をお願いしたいと考えます。

北海道支部だより

幹事長　窪田秀忠（38回生）

関東支部の皆様こんにちは。

9月30日の北海道支部総会には関東支部から「温泉と湖分科会」といわれる程、沢山の参加を頂きありがとうございました。

北海道は今年、日ハムの日本一、駒大苫小牧の大活躍、富士メガネのナンセン難民賞受賞の三大ニュースに沸いております。札幌も本年は例年より温かいですが、それでも予報では今週水曜日（11月8日）に雪が降るとの予報です。

今回の支部便りは北海道支部総会で私が講演しましたナンセン難民賞について、当社受賞の理由を通じ、評価いただきました企業の社会責任について述べさせていただきます。

当社富士メガネ金井会長が難民のノーベル賞と言われる、ナンセン難民賞を、国連高等弁務官（UNHCR）より、日本人として初めて受賞しました。受賞者には記念のメダルと難民のために使用するという限定付きで10万$が支給されます。授与式はスイスのジュネーブ、UNHCR本部で国連及び各国関係者四〇〇人参列の下に厳粛にとり行われました。

日本では余り聞きなれないナンセン難民賞ですが、ノルウェーの探検家で且つ難民救済にも多大の功績があり、第一回ノーベル平和賞の受賞者で、初代難民高等弁務官でもあるフリチョフ・ナンセン氏にちなんで名づけられたこの賞は、難民の窮状に焦点を当て、難民に多大の貢献をした個人もしくは団体をたたえるために1954年に創設され一年に一人、もしくは一団体が表彰されます。過去には国境無き医師団、タンザニアのニエレレ大統領、ルーズベルトアメリカ元大統領夫人などが受賞しています。

今回受賞の反響として、お祝い→ノルウェー国王ほか内外より一五〇を越す花、祝電。テレビ放映→NHKニュースほかで6回、子供ニュースにも、国外テレビ地元テレビ8回、新聞掲載→全国紙（スポーツ紙も）16回、地元新聞20回以上、地方新聞約30紙、その他業界紙。沢山の講演依頼と、改めてこの賞の国際的な評価、大きさを実感しました。

今回の受賞対象となった当社の「海外難民眼鏡寄贈プロジェクト」は1983年「視援隊」と名付け、タイのインドシナ難民のキャンプに社員5名が出向きスタートしました。

我々のプロジェクトはメガネを単に送るだけではなく、直接難民キャンプに金井会長を団長とする当社社員が出向き、難民一人一人の視力を測定し、夫々に適した新品のメガネを提供します。当然私も中心的存在として参加しております。メガネを送るだけでは、日本のメガネは近視用が多く、一方難民の多くは遠視のため、度数が合わないからです。

1983年にタイでスタート、ネパール、アルメニア、アゼルバイジャンで実施、これまでに10万8千組のメガネを寄贈しました。これらのメガネは難民の自立、職業訓練、学習に役立っています。なかには視力が出ないと諦めていた人も多く、当社「視援隊」の検査により視力の回復した難民も数多くいます。

今回の受賞はこの直接視力回復と各難民キャンプでの現地スタッフへの検査のスクリーニング、そして最近は難民の「安全保障」の見地からも評価されました。更に20数年にわたる国連UNHCRとの提携は、当社のような地方の中堅企業でもUNHCRとの合同により、このような社会貢献（この部門では我が国でダントツ、世界でも10位）ができるモデルとして、世界的に注目を浴びるようになりました。

今後は暫らくアゼルバイジャン地方の活動を続けた後、アフリカ、アフガン、サラエボ、ミャンマー等、希望が沢山来ており、難民のいない世界がくる事を祈りつつ、この活動を続けたいと思います。

東海支部だより

幹事　瀬沼憲司（64回生）

関東支部の皆様こんにちは。

今回は東海支部からいつもの「野球＝中日ドラゴンズ」ではなく、「サッカー＝名古屋グランパスエイト」の話題をお届けいたします。

私は東海支部の総会や懇親会を時々早退することがあります。総会や懇親会が行われる土日には、サッカーJリーグの試合が開催されることが多いからで、名古屋グランパスエイトの応援に行くためであります。東海支部の久保地

支部長は、J1名古屋グランパスエイトの役員もされています。ですので私は東海支部役員でありながら何とか途中でお目こぼしをいただいて、スタジアムへと駆けつけております。

私は土佐校ではサッカーとは全く関わって無かったのですが、ちょうど大学入学で名古屋に来た頃にJリーグが開幕し、そのまま自然に名古屋グランパスエイトがひいきのチームとなりました。大学付近で時々リネカー選手やストイコビッチ選手などを見かけ、サインを貰ったり出来たのもファンになった理由でしょう。しかし、スタジアムへ通うほどの熱心なサポーターと言うわけではありませんでした。周りにそう言う人がいなかったのでスタジアムに行くという発想が出来なかったですし、その頃はテレビでもよく試合が放送されていたためスタジアムに行ってまでと思えなかったのかもしれません。

それが新婚旅行をなぜか98年のフランスワールドカップ観戦ツアーに申し込んだことで大きく変わりました。98年のフランスワールドカップでは、有名なチケット問題に巻き込まれてしまい、ヨーロッパに到着した時にチケットが確保できていない事を旅行社から聞かされ、ツアーは大騒ぎになってしまいました。結局スタジアム近くまで行くもチケットは確保できずトゥールーズ市が用意してくれたパブリックビューイングでの観戦となりました。しかし、そこでは日本のサポーターとアルゼンチンサポーター達が入り混じっての観戦となり、コミュニケーションなどもあり非常に貴重で楽しい経験となりました。そういう経験もあり、2002年の日韓ワールドカップではチケットを自力で確保し沢山の試合を観戦し、また名古屋グランパスエイトの試合はホームはほぼ全試合、アウェイにも時々行く程になってしまいました。

2006年のドイツワールドカップは、フランス大会の経験から旅行社には頼まず、チケット・宿・交通などすべて自分で手配し、7歳になる息子を連れて、ホームステイなどで各地を廻りながら8試合を観戦してきました。ドイツの方たちはことのほか親切で、私たちが少しでも困った様子をしていたらすぐに声をかけてくれ、助けようとしてくれました。また、さすがにヨーロッパで行われたワールドカップだけあり、試合が行われる日にはその街を各国サポーターが埋め尽くし、その国のユニフォームカラーで染まる程の熱狂ぶりでした。また日本―ブラジル戦においては、我が名古屋グランパスエイト所属の玉田選手がゴールを決めてくれ、それを目の前で見られたことはこの上ない幸せでした。

ますますサッカーにのめり込んで行っていますが、東海支部での総会・懇親会では校歌斉唱時の掛け声役を任命されてしまっており、なんとかサッカーの試合とかち合わない様に祈っているところです。

関西支部だより

幹事　古谷理恵子（69回生）

「ホームカミングデー」に今年8月初めて参加しました。そういうイベントがあることは以前から知っていたのですが、なかなか帰省スケジュールと合わずに参加する機会を逃していたのです。今年は、中学の時からの友人と予定も合い、参加することができました。

私とその友人は中学・高校と吹奏楽部だったので、現役部員とOBによる吹奏楽部の演奏会を一番楽しみにしていましたが、まず部員数の多さに驚きました。そして、その演奏のレベルの高さにもさらに驚かされました。私達がいた頃は、部員数も中高合わせても30名程度、演奏レベルもいつもコンクールでは銅賞という細々とした吹奏楽部だったのです。それが、今や人数も60名くらいでしょうか、2倍に増え、コンクールも中学校の部では金賞をとったと聞き、とても嬉しかったです。

私達の代から、吹奏楽部の指導や指揮を外部の先生にお願いするようになったのですが、今もその西岡先生が続けて見てくださっているとのこと。西岡先生のお陰で、ここまで吹奏楽部もこられたんだなあと思うと感慨深かったですし、感謝の気持ちでいっぱいです。

曲目は運動会でいつも演奏している「星条旗よ永遠なれ」や「土佐高校歌」等思い出深いものばかりで、とても懐かしく、また演奏してみたいなと思いました。

「ホームカミングデー」の実行委員の皆様、とてもいいイベントを作っていただき、ありがとうございました。

広島支部だより

事務局長　山崎迪子（40回生）

お久しぶりです。広島支部は昨年の山崎です。広島支部の総会で役員の体制が代わりましたのでお知らせします。永らく会計幹事を務めた中山和敏さん（40回生）に代わり小島康幹事（37回生）が就任致しました。

名誉会員　竹村照雄（20回）
顧問　岡村進介（30回）
支部長　沖　修一（40回）
事務局長　山崎迪子（40回）
会計監査　沖田道子（41回）
会計幹事　小島　康（37回）
幹事　宮田賢二（33回）
同　門田佳代（49回）
同　川崎一仁（50回）
同　森沢範康（50回）
同　大谷準一（51回）

同　　田代裕尊（54回）
同　　山本　紳（55回）
山口県同　妹尾加代（35回）

ところで毎年の行事となっていた「やまもも」ツアーも今年は、天候不良と不作の為中止となり来年こそはと希望を膨らませております。高知と違い広島では「やまもも」は、7月も半ばにならないと収穫できません。昨年は雨の中、沖支部長の奥様にあきれられ、他のメンバーからは本気にされないなか、沖支部長と川崎幹事、私の3人が食べたい一心で濡れながら採りました。以前は広島でも「やまもも」を売っているところがありましたが、最近ではこの方法でないと食べることはできません。いつものことながら「やまもも」を食べながらしばし高知の話に花が咲きます。

さて広島支部総会は、すべての総会のラストを飾って11月25日に行います。今年の講師は、関東支部から筒井康賢氏（41回生）にお願い致しました。ホームカミングデーのお話が聞けなかった私達の為に、その時話されたことと、話足りなかったお話をして下さるそうです。

終了後のお楽しみになっておりました「青春の集い」の「梅太郎」が、この夏閉店致しました。関東支部でもこのお店に行かれた方は沢山いらっしゃると思いますが、女将が高齢の為とのことでした。残念です。もう一つの「歌わないカラオケルーム」は、ことしも開催予定です。他の支部の様にラウンジのほうが良いかなと同じホテルの「カラオケルーム」と「ラウンジ」を一応検討しましたが、予算の関係で今年も「カラオケルーム」となりました。歌いたい方は、三次会で美声をご披露下さい。御案内します。

広島の紅葉は、まだ県北の山々ですが総会の頃にはきっと市街地や宮島・錦帯橋が見頃ではないかと期待しております。そのころには、瀬戸の島々でとれる蜜柑もおいしくなり、牡蠣もそろそろいい時分を迎えているはずです。飛び石連休中ではありますが、皆さん広島にいらっしゃいませんか？

香川支部だより

幹事　大石　浩（54回生）

関東支部のみなさん、こんにちは。香川支部事務局担当の大石と申します。

さて、今年の香川支部総会は、例年どおり七夕総会と称して7月第一土曜日の7月1日に開催しました。当日は、母校から三浦教頭先生をはじめ、同窓会本部、各支部役員の皆さんにご出席いただきました。関東支部からは泉谷支部長にご出席いただきました。ご多忙の中、また遠路を本当にありがとうございました。

今年は、19回生の大先輩から72回生の若手まで44名の仲間が集まり、例年同様、大いに盛り上がりました。

また、今回の総会では、役員の交替がありました。これまで長く支部長を務めていただいた土田哲也支部長（32回）から支部長交代のお話があり、宮地正隆幹事長（36回）が新支部長に、中澤正良幹事（38回）が新幹事長に就任することとなりました。その他にも、転勤により2名の役員が交替となりました。なお、土田前支部長には、顧問に就任していただき、引き続き支部活動をご支援いただくこととなりました。新体制となりますが、今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、これまでにもご紹介してきましたが、かつて四国の玄関口といわれた高松ですが、近年の再開発で駅周辺はすっかり様変わりし「サンポート高松」として生れ変わっています。香川支部の総会も、一昨年からこのエリア内にある「シンボルタワー」で開催しています。中心となるのはもちろんＪＲ高松駅です。瀬戸大橋のおかげで、今では高松はじめ四国各地から岡山まで特急列車が直結し、東京や京阪神への移動時間はずいぶん短縮されました。一方、駅前にはバスターミナルが新しく整備され、最近利用度が高まっている高速バスが数多く発着しています。とくに近年、関西圏への移動は、明石・鳴門ルートで高速バスを利用する人が増えました。早くて安く、梅田、難波、三宮など各都市の中心部に直結する便利さが受けているようで、ビジネスはもとより、土日には、大阪や神戸にちょっと日帰りでショッピングという女性陣も多いようです。また、四国内の移動も、高速バスを利用する機会が多くなりました。かつて高松から高知への帰省は、32号線で猪鼻峠をこえて池田に入り、大歩危のドライブインで一服して、高知を目指すという3時間半ほどの長時間運転を強いられていましたが、今では、高松・高知自動車道で県都が直結、山間部の二車線化工事も進み、2時間もあれば楽に高知に行けるようになりました。高速バスなら、一眠りしている間に到着という感じです。

鉄道、架橋、高速道路などインフラ整備で、本州への距離はずいぶん縮まりました。しかしながら、依然として四国から本州へ「出る人」のほうが「入る人」より多いような気がします。四国が元気になっていくためには、これまで以上に、域外からたくさんの人に来てもらうことが何よりも重要です。ソフト面で、四国の魅力をもっとアピールしていくことが大切かもしれません。

関東支部の皆さんも、高知に帰省の際には、是非とも高松まで足を伸ばし、映画「ＵＤＯＮ」や「セカチュウ」の世界を堪能して下さい。最後になりましたが、皆さまのますますのご活躍・ご健勝をお祈りいたします。

お悔やみ申し上げます

32回　大住高史　H17-9-28
41回　濱中良子　H18-8-17

ガーナ高校生たちと「原宿スーパーよさこい」に参加して

8月27日。本番前出発式。JICA地球ひろば前

土佐高校1年0ホーム
梅田理紗

「東京でよさこい」と言われても、どんなに盛り上がるのかと、正直最初は期待していませんでした。

けれど、いざ表参道に行って、とても驚きました。ものすごくたくさんの人がよさこいを見にきてくれていたからです。『よさこい』のすごさを実感させられました。

練習は途中からの参加だったので少し心配でしたが、ガーナの人達も向こうの高校生も明るく楽しく踊っていたので、私達も楽しく練習ができました。夜にガーナの人々と麻布の人達とJICAで自主練のようなもの（？）で交流できたことも、良い思い出です。ガーナの人達に教えてもらったゲームはとてもおもしろかったし、道具も全く使わないので、すぐにどこでも出来て、良いなと思いました。

ガーナの人々と同じ所に泊れた事も良い体験になりました。彼らはとても時間にルーズで日本一あわてんぼうだと言われている私達高知県民は集合するのをずっと待っていたりしました。料理も日本では食べたことのないような不思議な食べ物もありました。でもガーナ人がそれらを普通に食べるのを見て、文化の違いを感じました。

今回、東京へよさこいを踊りに行って、たくさんの事を学び、知ることができました。ガーナ大使館に行ったことも自分にとって良い経験でした。また、ガーナの人達との交流、東京の高校生との交流と、楽しくよさこいを踊れたこと。5日間だけだったけれど、この夏最高の思い出になりました。

こういう機会がまたあったら、是非参加したいです。

今回このような体験をさせていただけて本当に嬉しかったです。企画された方々、一緒に踊ってくださった方、出会ったすべての人々に感謝します。

土佐高校教諭
鎌田圭子（47回）

8月24日～28日まで、土佐高1年生5名を連れて、JICAの地球ひろばに滞在し、20名のガーナの高校生たちと合宿生活が始まりました。ガーナ大使館訪問では、ガーナ大使ご夫妻がガーナ料理で温かく迎えてくださり、2年前にガーナの日本大使館公邸でお会いしたことを覚えていてくださったことは、大変うれしいことでした。

25日より、よさこいの合同練習が始まりました。ロッテの社員、ガーナの生徒、麻布学園、女子学院、土佐の生徒、土佐高同窓生の約百名合同チームですが、すぐに打ち解けて熱心に練習しました。26日には、昨年の受賞チームによる明治神宮への奉納の踊りを見ました。この素晴らしい踊りに刺激され、ガーナの生徒たちの目の色が変わり、自主練習にも積極的になり、麻布学園高校の生徒とともに、夜9時まで練習が続きました。

いよいよ本番の27日。中村裕子さん（37回）が着付けを手伝ってくれました。すべてのチームの先頭をきって踊りが始まります。四百メートルあるストリートを4回連続踊るのはすごく大変です。私も地方車の上にのり、かけ声をかけました。上から見ると、短期間の練習にも関わらず列もそろい、みんなの頑張ろうという熱意が伝わり、感動ものでした。ガーナの生徒も、「よさこい　イズ　ファンタスティック！」

明治神宮内でのお弁当はとてもおいしかったです。それは、踊りきった興奮と、ひとつになった連帯感が生まれたからでしょう。2つ目の明治神宮のステージではのびのびと踊り、緑の木々に囲まれて、赤の衣装がひときわきれいでした。3つ目のメーンステージでは、夕方で照明があたり、最後とあってみんなのボルテージもあがりました。さすが東京、こんなにも多くの人が集まり、その前で踊れるというのは踊り子冥利につきると思いました。

全国から約百チームが集まりすごい意気込みで、こんなすごい「原宿スーパーよさこい」を裏方で仕切っているのが、私の初めての生徒だった角陽一郎君（72回）であり、高知新聞から門田朋三さん（72回）が取材に来てくれました。

夜、地球ひろばで打ち上げがあり、国境を越えた若い人

ガーナ大使館にて。浅井前大使と土佐高生。

同士の交流は、大いに盛り上がりました。このような機会を作り運営をしてくれた、ガーナ支援会、関東支部の皆様方、本当にありがとうございました。最初から最後までガーナの生徒たちにつきあって下さった中田昌志様（35回）、そして、民間人同士の交流を大切に育んでこられた、浅井伴泰様（30回）浅井和子様（前ガーナ大使・35回）に、心より感謝申し上げます。きっと若い人たちの和が、いつか芽を出し、国同士の交流が深まり、世界平和へとつながっていくことでしょう。

今回、もっと多くの土佐高生を連れてきて、麻布や女子学院の生徒たちとも交流してほしかったし、次はガーナへ生徒たちを連れて再訪問したいと思ったものでした。

（両端）浅井前ガーナ大使ご夫妻
（中央）駐日ガーナ大使夫人、左から2人目筆者

今こんなことしています 26

レクサス―国産発のプレミアムグローバルブランド構築に向けて

川渕　辰夫（63回生）

「レクサス」の歴史は、北米での１９８９年の初代「ＬＳ（日本名セルシオ）」の投入と共にスタートしました。

メルセデス・ベンツやＢＭＷ等の欧州プレミアムカーに匹敵する高品質と日本車ならではの高信頼性を両立させつつ、ライバルを震撼させた圧倒的な静粛性、妥当な価格設定と経済性（低燃費）、そして最高の接客とアフターフォローを引っさげて登場しました。そして瞬く間に北米で大成功を収めました。

一方、日本国内の自動車市場は、新車販売台数のピークを迎えた90年には六〇〇万台に迫る勢いでしたが、その後漸減を続け、05年には三九一万台と約二〇〇万台も落ち込んできています。このような流れの中で、今後10年先の成長シナリオを模索していたトヨタ自動車は、長い議論とマーケティング調査の末、日本国内へのレクサス投入を決意しました。

こうして、２００５年８月30日に全国一四三のレクサス販売店が同時開業し、これと同時にＧＳとＳＣが、同年10月にはＩＳが、本年９月にはレクサスのフラッグシップセダンであるＬＳが投入されましたが、これは、北米で成功したレクサスをそのまま日本に持ち込むのではなく、本国である日本での導入を期に、「米国版レクサス」から「世界に通用するグローバルブランドへの脱皮」を図り、全世界的に通用する真のグローバルブランドとなることを目指しています。

さて、私がレクサスに関わることとなった経緯を少しお話したいと思います。

昭和63年に土佐高校を卒業後私が進学した岡山大学は、田舎で交通の便がよくなかったことから（クルマなしにはバイトひとつ行くにも大変でした）、学生間での自動車の普及率が極めて高いところでした。このような環境下で、私も大学生時代からクルマ好きとなり、就職も倉敷市水島に工場のあった縁で三菱自動車に就職し、知的財産部で技術ライセンス契約や商標関連業務を、その後宣伝部にてＴＶＣＦやカタログ等の制作業務を担当しました。

その後、三菱自動車が数々の社会的な事件を引き起こし将来に不安感が広がる一方で、自分の築き上げてきたスキルや経験を活かせるところがないか模索していたところ、レクサスの日本導入関連業務に携わる人材を求めている会社があることを知り、平成16年10月に転職を決意しました。

こうして私が今勤務している㈱デルフィスは、トヨタ自動車の一〇〇％子会社の広告代理店であり、レクサスの日本国内導入検討段階から、国内レクサスのブランド戦略立案に関わる各種調査を行うと共に、国内レクサスのブランド／リテールコンセプトの立案に関わってきました。そして、２００３年４月より、レクサス関連業務の専任推進体制として、㈱電通とのバーチャルカンパニーである「Team dXD」が結成され、トヨタ自動車の戦略パートナーとして、ブランド戦略、広告宣伝、セールスプロモーション、人材教育、営業活動サポート等あらゆる分野をサポートしております。私は、この「Team dXD」の一員として、現在人材教育をメインとした業務に携わっています。

レクサスでは、全国約一六〇店舗の全スタッフ約二四〇〇名を対象に、ゼネラルマネージャー（レクサスでは店長をこう呼んでいます）やセールスコンサルタント（営業スタッフ）はもとより、テクニカルスタッフやレセプショニストまで、様々な教育プログラムを企画・開発し実施・運営しています。

この人材教育は、２００３年にトヨタ自動車が買収し大幅な改修を行った富士スピードウェイと、この敷地内に設立されたレクサス専用の教育施設「富士レクサスカレッジ」を中心に、「ブランド理解浸透」「接客おもてなし」「店舗マネジメント・チームワーク」「商品研修」の４つを柱とした数十ものカリキュラムを、その時々の狙いに応じて組み合わせて実施しています。

この中で、特に私が中心となって進めているものが「商品研修」です。これは、レクサスの新車が投入される毎に全スタッフを集め、サーキッ

レクサス販売店

トでの高速試乗体験や商品知識に関する座学等を企画・実施するものです。

来年にはＦ１も開催される富士スピードウェイで発表前の新車に一足先に触れる事ができるのはクルマ好きとしては楽しいのですが、一方、二四〇〇人もの受講者が参加する研修を遅滞なく且つ絶対に事故のないよう進めていくことは、非常に胃が痛い作業でもあります。この他、商品学習の補助ツールや、店頭でお客様と商談やクルマ談議を交わしていただくための「コンサルタント研修」等も手がけています。

レクサスが鳴り物入りで日本に投入されて既に1年以上が経ちますが、販売台数が目標に未達であること等を捉え「レクサスは失敗では？」との風評も散見されます。また、メルセデスやＢＭＷに比べ、デザインに個性がない、走りに「味」が感じられないなどのご意見もあります。しかしながら、トヨタ自動車も、そして我々Team dXDも、わずか1年で、百年に近い歴史とヘリテッジを持つ欧州プレミアムブランド勢に拮抗できるとは、当初から思っていません。10年、20年先を見据えた長期的視点のもと、レクサスを「日本発のプレミアムブランド」としてこれからも育て上げていく事が、我々に与えられたミッションであり、今後もレクサスの行く末を見守っていただけたらと思います。

最後に、もしレクサス車をご検討の、あるいは興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非お近くのレクサス販売店に足を運んでみて下さい。レクサス販売店は少し敷居が高いイメージを持たれているかもしれませんが、決してそんなことはありません。前記のようなさまざまな教育研修を受けたスタッフが、心のこもったおもてなしで、皆様を迎えてくれるはすです。

そして、これがきっかけで、皆様とレクサスブランド、そして店頭スタッフとの末永いお付き合いが始まれば、「レクサス」ブランド創りに関わる一人として、こんな嬉しいことはありません。

来春卒業の82回生諸君！　同窓会へ　いらっしゃ～い

＜2007年　本部各支部同窓会スケジュール －開催順－ ＞

１．関西支部　　4月21日（土）　大阪市天王寺区上本町『都ホテル大阪』
　　http://www.miyakohotels.ne.jp/osaka/
２．東海支部　　5月19日（土）16時30分
　　名古屋市中村区名駅『ホテルキャッスル・プラザ』82回生は無料招待
　　http://www.castle.co.jp/plaza/
３．関東支部　　6月2日（土）　東京駅真ん前の丸ビル７Ｆ『丸ビルホール』　82回生は無料招待
　　http://www.hc-marubiru.jp/
４．香川支部　　7月7日（土）　高松駅前　高松シンボルタワー17Ｆ『オフィスサポートセンター』
　　http://www.symboltower.com/
５．北海道支部　7月　北海道の花が一斉に開花する土曜日（日時未定）
　　北海道最大の水産会社佐藤水産直営『まるだい亭』
　　http://www.sato-suisan.co.jp/restaurant/marudaitei.html
６．本部ホームカミングデー　8月12日（日）土佐高体育館他　懇親会『得月楼』
　　http://www.tokugetsu.co.jp/indexl.html
７．広島支部　　11月　安芸の宮島が紅葉の見頃を迎える土曜日（日時未定）『広島県民文化センター』
　　http://www.pref.hiroshima.jp/kenmin/bunkashin/bsinko/kbhiro01.html

※卒業後の住所が決まったら、各支部事務局へ連絡して下さい。

[母校及び同窓会本部・各支部一覧表]

土佐中学・高等学校　事務局　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394(FAX)088-833-7373(E-mail)tosa@tosa.ed.jp(HP)http://www.tosa.ed.jp/index.html
土佐中学・高等学校同窓会本部　会計幹事　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394(FAX)088-833-7373(E-mail)tosa@tosa.ed.jp(HP)http://www.tosaobog.com/
同窓会北海道支部　事務局長　島村昭範　〒060-0062　札幌市中央区南2条西1丁目3番地北専ビル9F
(株）富士メガネ　窪田社長気付
(TEL)011-893-3509(FAX)　(E-mail)shima49n@yahoo.co.jp
同窓会香川支部　事務局長　武山正人（担当：大石浩）〒761-0113　高松市屋島西町1850-1 四国電力(株)
(TEL)070-5750-2120(FAX)087-841-7809(E-mail)ooishi11737@yonden.co.jp
同窓会広島支部　事務局長　山崎迪子　〒732-0062　広島市東区牛田早稲田1-24-7-210
(TEL)082-227-2656(FAX)082-227-2656(Email)myamazaki@dion.enjoy.ne.jp
(HP)http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/
同窓会関西支部　事務局長　原田和人　〒530-6001　大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内
(TEL)090-1073-7822(FAX)　(E-mail)harada73@hotmail.com(HP)http://www.tosa-ko.org/kansai/
同窓会東海支部　事務局長　神宮美恵子　〒468-0075　名古屋市天白区御幸山1201 御幸山ﾊﾟｰｸﾏﾝｼｮﾝ B-301
(TEL)052-837-5834(FAX)　(E-mail)jjingu-m@crux.ocn.ne.jp
(HP)http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/
同窓会関東支部　事務局長　二宮潔　〒100-8222　東京都千代田区丸の内1丁目6番5号丸の内北口ビル
森濱田松本法律事務所弁護士市川直介気付
(TEL)03-5223-7719(FAX)03-5223-7619(E-mail)naosuke.ichikawa@mhmjapan.com

須藤博志君を新制作展に訪ねて

水野 孝（41回生）

東京都美術館で開催された第70回記念新制作展に出展している須藤博志君（41回生）から案内が届き10月1日の日曜、曇り空の上野公園に出掛けました。一昨年の暮に山崎郁太郎君（41回生）と連絡を取り合って、須藤君の埼玉玉川村のアトリエを訪問し鯨鍋を囲んで以来の再会であります。

須藤君は土佐高卒業後、東京造形大学の彫刻科を経て東京藝術大学彫刻科大学院修士課程を修了。自然石を素材とした抽象彫刻の創作を一貫して続けてきました。同期でも美術を仕事とする仲間は少なく、またそれぞれの仕事に没頭する日々で顔をあわせる機会も数えるほどでした。アトリエ訪問のきっかけは高知の41回同窓会幹事大黒英世君の呼び掛けによる「住所不明者探し」で発見以来、土佐高同期生としての親交が再び始まったことによるものでした。特に41回生メーリングリスト上では当人不在のままで時折の話題の主となっています。今年の新制作展にも最終日に同期生二人が訪ね、関東支部ホームページに記事がアップされています。

さて、都美術館の展覧会場は日曜日とあって多くの人で賑っており、首都の美術展で最近目立って増えてきたシニアカップルや学生グループの中でうまく会えるかの心配もあったが、体重百キロの巨漢はエレベーターホールに立つシルエットで直ぐに判り、再会の握手となった。伴って行った妻とも玉川村以来の嬉しい笑顔の交換となりました。

彫刻フロアにところ狭しと並んだ作品群を掻いくぐりつつ須藤君の解説を聞き、作品を眺め、勝手な感想をいい、などしながら彼の作品の前に立った。「風の：」のテーマを追い続けている今年の作品は「風の塔・2006」。ブラジル産の濃い茶紫色のグラニット（花崗岩）を素材に使い、矩形と三角の面で構成された立体が力強いフォルムとなっており、穿たれた空隙の形と石の仕上げ色の違いによって凝縮された空間に奥行きが生まれ、イマジネーションの世界が広がり、高いテラスに立って遠い水平線の存在を感じるような不思議な作品でした。エッシャーの画が立体化したような、空間に風や太陽の光が感じられるという感興がある。中心にある小立方体が特に入念に磨きこまれているのには、どうやら意図があったようで、須藤君の目が悪戯っ子のように笑う。

現在彼が非常勤講師として在籍している文星芸術大学（宇都宮市）の教え子の山本元子（はるこ）さんが丁度会場に来ていた。いくつかの大学を経てきた才媛で大きな目が印象的な頼もしい後輩。師弟の談笑の様子を早速ツーショット。

今年は新制作展70周年記念ということで会結成期の作家たちの小品が一箇所にまとめて展示され、壁際にはしっかりガードマンが控える。今は皆大作家となり、然るべき作品価値が認められている。

同じフロアの一般参加展示に回りながら「今年は力のある若い作家が目立って多い」とのこと。会派の活動も隆盛や衰退を繰り返しながらまた新たに多くの才能が集い変化していく。この世界では我々の年代は「まだまだ若い」。思えば芸術家の求める道は終わり無きほどに遠く世俗の測り方とは違った時間の流れがあり、百歳を超えてなお創作意欲の絶えなかった大先輩も数多くいる。

レストランに移り、名物のカレーライスをいただきながら話を聞く。ここ暫くは都心に出来る新美術館への団体展の移転問題などに時間を割かれていたが、やっと創作に没頭できるようになった。大学の講座のない日には一人アトリエに篭る。瞑想を続けて気がつけば夕暮れになっていることも。石を刻むことは肉体を酷使するが上半身に偏る。運動もしたいが時間がとれないという。高校では剣道部に属していた。「居合をやれば？」と聞いたら「特製の木刀で素振りは続けている」と。そういえば古武士の風貌を醸している。年の暮れに玉川村で鍋を囲む約束をして混み合う美術館を後にした。これからが彫刻家として「仕事をする年代」である須藤君の益々の活躍を祈って。

作品「風の塔・2006」の脇で。向かって右が筆者

昭和40年高3の頃。上野公園に立つ須藤君

ふるさとへの手紙（八）

東京大学公共政策大学院二年　高村　麻裕子（76回生）

今年は、私にとって土佐高のつながりをさらに強く意識する年となりました。二〇〇六年は、卒業回数の下一桁が6の回生が関東支部同窓会の世話役を務めるということで、76回生の私も幹事の一員として準備段階から参加することになったからです。

2月の幹事初会合から、何度も打ち合わせを重ね、6月の総会・懇親会実施に至るわけで、幹事役は一見面倒だと思われ、敬遠されがちかもしれません。もちろん、面倒な仕事がないわけではありませんが、それを超える素晴らしい先輩たちとの出会いがありました。

サークルの先輩と。左端筆者

同窓会の準備では、36回生がそのリーダーシップで引っ張って下さって、最低限のことしかやらないよと言いつつも(笑)きっちり仕事をする46回生に頼りがいを感じ、名簿作成や受付など緻密な作業を続けて下さった56回生に恐縮し、66回生と私たち76回生で球拾いをしていく感じでした。打ち合わせの後には、皆で土佐料理のお店にいって高知の地酒やタタキをご馳走になり、土佐高の思い出話や先輩方の人生体験を伺いながら、楽しい時間を過ごさせていただきました。世代を超えて打ち解けて、ひとつのことに向かって団結して動ける、やっぱり土佐高っていいなあ、と感じました。

8月のホームカミングデーでは、吹奏楽部の現役生やOB・OGの方々と一緒に演奏することができ、私自身がアルトサックスを吹き部活に明け暮れていた中学・高校時代に戻ったような気がしました。

また、関東同窓会で知り合った先輩方とあらためて高知で呑む機会もあり、本当に楽しかったです。他の高校の出身者と話をしてみても、土佐高ほど同窓生のつながりが強い学校はめったに無いと思います。今後とも、6の回はもちろん、同窓会等を通じて知り合った皆さんとのつながりを、大事にしていきたいと思います。

総会スタッフルームで。右から2人目筆者。

さて、土佐高を卒業して早5年半が過ぎ、大学院に進学して親に余計な負担をかけてきた私ですが、この度外務省から内定をいただき、来年4月からは外交官としてのキャリアをスタートできることになりました。坂本竜馬や中岡慎太郎らが活躍し明治維新を迎えた一八六八年、そこから77年後、一九四五年に敗戦を迎えた日本を吉田茂が立ち直らせました。さらに77年後は二〇二二年、ちょうど私たちが40歳を迎える頃ですが、国際情勢が加速度的に変化する中、日本が平和と繁栄を享受でき、その魅力と存在感を保つことができるよう、その一翼を担えればと思います。

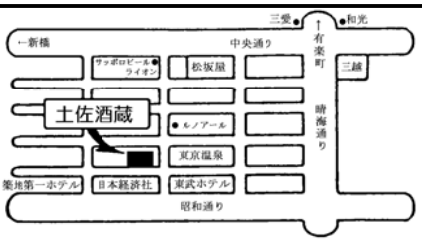
同窓の先輩では35回生の浅井和子さんが駐ガーナ特命全権大使としてご活躍でしたが、私も同じく土佐で培った「はちきん魂」を発揮して、質実剛健、着実に成果を重ねていけるよう、日々精進したいと思っています。自主性を重んじる土佐高で育ち、好きな道を進んできましたが、それも家族や周りの人々の有形・無形の助けがあってこそであり、「報恩感謝」を実感する毎日です。

TONTON　カラオケ・スナック

幸田　みどり

（土佐女子出身）

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-46-7 第三平沢ビル7F
TEL 3205-3177　（西武新宿線北口前）



季節のふるさとの味

銀座7－12－4　友野本社ビルB1
電3545-3855　銀座第一ホテル通り

土佐酒蔵

第10回土佐高ハイクの会　八方尾根の旅

弘瀬　孝友（38回生）

白馬連峰の美しさは、岩が削られて崩れて行く急な斜面、その合い間を縫って幾重にも筋のように流れてゆく緑、何者をも受け付けない巨大な岸壁、それらが輻輳した斜面を水が流れ、雪渓が残る、一幅の大屏風のように拡がるところにある。

正面には、二千九百メートル余の白馬岳を筆頭に唐松岳、鑓ヶ岳、杓子岳、天狗、不帰の嶮、いずれも二千五百メートルを超える峰々。振り返ると一面の雲海の上に、近くは戸隠、黒姫、火打、雨飾、その先には志賀高原の山々、更には浅間、高峰高原の山々、さらにその先には八が岳連峰、北岳、甲斐駒が岳などの南アルプスの連峰までが見える。

今回は記念すべき10回目ということで、信濃の北国街道の宿場の海野宿、戦没画学生の遺作を展示する無言館、そしてこの八方尾根に行こうということになった。

土佐高校は他の有名進学校と違った何かを持っているようである。最年長の23回生の山下先輩が「参加する前は学年も違うしナア・・・と思って億劫に思うが誘われて参加すると中毒になる。私達の頃は真面目一方の生徒が多かったがこの会を主催する三七、三八回の方々はどこか違う、中学の入試がこの二年だけは内容が違っていたのではないろうか・・」とおっしゃった。間違って吉本興業か、劇団の試験で入学したのが37、38回生の一部に紛れ込んでいるのである。主役はオレだ、という連中が多いので、行きのバスの中、泊まりの夜の部、帰りのバスの中は一段と盛り上がる。その人たちがいるから10年も続いているともいえる。

往きの車中で10回連続して参加した6人の人々が、影の元締めでもある永野博子から表彰状を授与された。その表彰状の文面に「・・無謀にも富士登山などを企画し、多くの参加者に体力の維持の重要性を体感させるとともに自らの実力・体力・年齢を省みることなく・・・・その努力と蛮勇は大いに土佐のいごっそう、ハチキンの声望を高め、他の学校には例を見ない登山の会を続ける事が出来ました。・・」とあるようにちょっとしたギネス物である。根が、遊び好き、喋るのが好き、酒が好き、そして好奇心が強く、軽はずみなのが幸いしている。表彰された6人は、38回同期の中島宏、三宅ヨシロウ、そして37回の橋田夫妻、中村夫妻である。

中島や三宅は、間違ったら今頃はテレビのバラエティー番組に出て司会や毒舌コメンテーターをしていたかもしれない才覚の持ち主、そして37回の橋田夫妻、中村夫妻はこの手の催しにかけての積極性と実行力、口説きのテクニックは秀逸で、嫌と言う人も必ず説得されて参加する。黒いモノも白い、と言わせる実力の持ち主である。この6人なしでは10回はなかったであろう。勿論この人たちだけではない。タレント性の強い元都議会議員候補の高田谷、細木数子のような永野博子、二枚目でありながら三枚目に徹する岡田四郎、おとぼけのカメこと西内など枚挙にいとまない。中島などは私のことを「飲むとハイマー」などと呼び、呆け老人呼ばわりする。

一日目の行程を終えての夕食の宴会では、中島がまるで島田紳助のようなテンポで司会をした。ご夫婦連れで参加された23回の森先輩や37回の宮本・馬田先輩方も中島の軽やかでかつ、詮索好き口調に乗せられて、なかなか話してはもらえない日ごろの伴侶の行動を吐露された。

某大企業の専務までしている宮本先輩は意外とその顔つきからは想像できないワンマンでもあり、「家の鍵を持っているのに、何時に帰宅してもチャイムを鳴らして玄関に迎えに来させてきた」という。しかも一度たりとも帰宅時間を連絡したことはないらしい。「どこかで倒れているのじゃないかと気になることもしばしば、でした」と奥様はおっしゃる。土佐の男である。

反対に馬田先輩は夜遅く帰宅したが二階に寝ている奥様に気付いてもらえず（？）何度も小石を拾っては窓ガラスに投げ、サインを送ったがかなわず、近所の人にいぶかられてやむなく、タクシーで都心に戻り、カプセルホテルで一夜を明かしたという話をされた。奥様は立派なハチキンである。

加えて幸徳先輩が非常に心に残る話をされた。母親の死や父親の失業・暴力などで学業も遅れ、自暴自棄になっていた少年がひとりの女性教師により更生する話であった。涙する人もいた。

これを聞いた三宅が立ち上がり、「一言言わせていただきたい、今日幸徳あるは私のお陰である。その昔、どうしようもない不良であった幸徳を石川其治先生から、何とかしてやってくれ、宜しく頼む、といわれて下宿に引き取ったのは私である、今日のような話を出来る幸徳先輩の更生ぶりを見て、マコトにこれがあの幸徳か、と思って涙が出る」というようなことを述べた。お互い脛に傷を持つ身であろうが、事実関係は闇の中としても、みなの笑いを誘った。

其の日の夜は雨になり、二日目に予定した山行は危ぶまれた。スポット予報でも今夜は雨、翌日は朝方一時曇り、午後は雨という予報であった。翌日6時の朝食を終えて幹事連が鳩首会談の末、決行が決まった。霧にけぶる山腹をゴンドラが抜けて行き次第に高度を上げるに連れて一部の山塊が見え、少しずつ展望が開けた。「こりゃええかもしれんねえ」と話しながらさらに乗りついで行くとまた再び霧の中、という状況。リフトの終点に立ったときは景色の一部しか見えないが雨は上がった。それから自分の足で登り始めると風が霧を振り払い、山容が姿をあらわすようになった。そして八方池に到達した時には前出の雄大な景色を眺めることが出来たのである。

その後も雨は降らず、太陽まで出てきて登山の醍醐味を味わうことが出来た。「来て良かったア・・」と言う声がこだまし、山々を眺めながらの早い昼飯が一段と美味かった。宿を出るときは「せめて雨さえ降らなきゃいいか・・」と思っていたのが晴れ渡る山々を見ることまで出来たのだから、最近の流行り言葉で言えば「想定外」、いや「想定以上」の展開であった。宿のトイレに「神に見放されたる者よ、自らの手で運をつかめ」と書いてあった。まさに「ウン」をつかんだのである。

平均年齢が60歳を優に超えている集団でもあるが、一人それを下げてくれているのは関東支部の前事務局長でもあった美形の金澤由里さん。しかも独身。久しぶりに参加された大和田さんが、「ユリちゃん、土佐高の方々はレベルが高いのよ。グレードを落とさなくちゃ」と忠告していたが、ユリちゃんのお眼鏡にかなう後輩はいないものか？

大和田さんは、もとホノルルマラソンに参加もした女性アスリート、彼女は高山植物に造詣が深く、行く道々で皆に咲いている花々の名前を教えてくれた。特にカメラに命を掛ける澤村は、花という花を写して彼女から念入りにご教授いただいた。「これは？」「タカネマツムシソウよ」「これは？」「ミヤマリンドウ」・・後に作品をまとめて参加者に送ってくれるそうである。

無言館を訪ねた時に「いま生きておればきっと名を成したであろう」と思われる画学生やその肉親の方々の深い思いと悲しみを受け止め、平和の大切さを逆に実感した。帰りのバスの中は恒例のカラオケとなり、中村さんの美声とモノまね、それに大久保さん、大和田さん、金澤さんたちの美しい歌声も聞けた。この旅行のひと時は平和に生きている楽しさを味わうことの出来るときでもあった。

雨降る帰途のバスの中、私は後部座席でひたすら酒に浸りながらアルツハイマー寸前のところで突如レポーターに指名され、記憶をもとにこの手記を書いた。従って、失礼があったり、誤記や記憶違いはご容赦願いたい。

次回の幹事長は38回のたこチャンこと高田谷君となった。本物のギネス記録に挑戦すべくこの山行きはまだまだ続く。

岡崎のおんちゃんの思い出話（二）

23回生　岡崎昌生

エチオピアという国

◇ アフリカの角

アラビア半島の南、紅海の入口と印度洋の西北部に突き出しているアフリカ大陸の東北端に位置し、国土は一一〇万平方キロ（日本の約3倍）、北緯3度から18度の間にあり、熱帯圏に属する。

東はソマリア、南はケニア、西はスーダン、北はエリトリアおよびジブチの諸国に囲まれた内陸国であり、これらの中で、ソマリアとはその国境をめぐりしばしば武力衝突が起こっている。

◇ 三千年の歴史

その昔、シバの女王（現在のイエメンと紅海を挟んでエチオピア北部を領していた）が、数百頭のラクダに沢山の贈り物を携え、エルサレムにソロモン王を訪ねた。そして、二人の間に生まれた子が、BC10世紀にメネリク一世としてエチオピア王朝を開いたと伝えられている。

以後、ハイレ・セラシエ皇帝（在位一九三〇～七四、第二二五代）に至るまで、その間に盛衰はあったが連綿と続いたこと、そして、19世紀における列強によるアフリカの植民地分割をも乗り切り、独立を保ってきた唯一の国であることを人々は誇りにしている。

一九七四年、社会主義を標榜する軍事クーデター（メンギスツ大佐）により帝政は転覆された。

しかし、国内各地で起こった人民民主主義運動により。メンギスツ政権は一九九一年に崩壊した。

その後、暫定政府の期間を経て、一九九四年には新憲法の制定、議会制度も確立、新しい「エチオピア連邦民主共和国（Federal Democratic Republic of Ethiopia）」として発足し、社会諸般の整備、経済開発に努めている。

◇ 地勢・気候

東北部の砂漠地方、東部の渓谷地帯を除き、国土の大半は、二〇〇〇メートル前後の高原であり、蛾々たる山脈、そして最高峰は四六二〇メートル（北部のラス・ダッシャン）もある。

春夏秋冬はなく、雨季と乾季に分かれる。雨季は6月から8月おわりごろまで、日本の梅雨のようにジメジメではなく一日に何回かスコールのような強い雨が、時には雷鳴を伴い降ってくる。それが過ぎればまたお日さまが現れるといった調子である。

それ以外は2～3月にシャワー程度の雨があるが、あとは乾季で雨は無く、真っ青な空に太陽が輝く、そして夜はまさに手も届くような満天の星が瞬く。

気温は、低地では摂氏40度近く、高い山では摂氏0度にもなるが、都市、農村で人々の住んでいるところは、温帯なみの過ごしやすい摂氏20度前後である。

◇ 人口・産業など

人口は、六五〇〇万人（二〇〇〇年）、40年前に比べ倍増している。

国民の80％は農牧に従事しており、製造業はまだ少ない。

農作物では主食のテフ（粟粒のような小さい穀物）をはじめ、じゃがいも、菜種、ゴマなど豊富であるが、コーヒーは、当国南西部の地名カッファに由来するといわれ、その生産も多く、輸出額の半分近くに上っている。

家畜も多く、その数人口にも比すべしと思われる。ちょっと郊外に出れば沢山の牛の群れを追う子供達を見かける。二〇〇四年の数字によれば、牛（三八一〇万頭）、羊（一六六〇万頭）、山羊（九九〇万頭）であるが、豚は少ない。鶏も三五〇〇万羽と多く、その卵も出回っている。

したがって、皮革加工、農産加工品も輸出されている。

養蜂も各地で行われ、はちみつを蒸留した酒もなかなか美味いものである。

種族としては、アムハラ族、ティグレ族、オロモ族が主たるものであるが、その他大小80ばかりもあるという。

宗教は、キリスト教、イスラームほぼ同数で全体の90％を占め、残り10％はアニミストといわれている。

◇ エチオピア暦（EC）

ユリウス暦に従い、30日ずつの12ヶ月と残りの5、6日をパグメ（おまけの月の意）と呼ばれる1ヶ月とし、1年を13ヶ月としている。

また、西暦（グレゴリオ暦）より7年と8ヶ月遅れており、二〇〇六年9月11日がECの一九九九年1月1日である。エチオピアの観光宣伝には、この「13ヶ月の太陽」が使われている。

◇ 首都アジスアベバ

国土のほぼ中央に位置し、国の近代化をはかった二二代のメネリク二世が、北部から遷都し、「新しい花」と名付けたものである。

二三〇〇メートルの高原にあり、年平均気温20度C、快適だが、酸素がうすい。

国の行政機関、AUや国連機関、ホテルなどが立ちならび、やはり国の中心として繁盛している。人口は二五〇万人。

鉄道は、アジスアベバとジブチを結ぶ1本のみのため、道路は、首都から放射状に各地方都市を結んでいる。しかし、自動車数は乗用車4万台、トラック・バス7万台とまだ少ない。

航空は、国内14の飛行場を持ち比較的に便利である。国際航空では、ヨーロッパ、西アフリカ、アジアではインド、バンコク、北京まで定期便を運行している。

一方、四〇〇万頭のロバは身体いっぱいの荷物を背負い、鞭に従い悲しそうな目をしながら黙々と歩いている姿は、万古変りはないが、これもやはり地方運搬機関として世の中の役にたっている。

新婚さんおめでとう！

遠藤（旧姓谷口）瑞枝さん（67回生）

①出身地	飯能市	高知市
②星座	てんびん座	おひつじ座
③血液型	A	O
④趣味	野球観戦	読書

いか焼き と 美女

＜06夏　大阪、二つの出会い＞

岩村　康生（41回）

夏の終わりに大阪・梅田の高層ビルの一室で開かれたある研究会。休憩時間にお茶菓子代わりの「いか焼き」が出た。祭りの屋台で見るあの醤油にまみれたイカの姿焼きではない。お好み焼きを小さくしたようなもので半円形に折りたたまれている。

部屋中に香ばしいイカの香りが立ちこめ、生地の中にはタコならぬイカが見える。

「たこ焼きの次の名物はこれなんです」

阪神百貨店地下売り場は、行列ができる人気だという。

大阪人の発想は豊かで、自由で、遊び心に満ちている。初めてのいか焼きを食べながらあらためて大阪の奥の深さを思い知らされた。

その夜、研究会の世話役の方々に連れられて二次会に繰り出した。北新地のネオン輝く晴れやかな街、ビル七階のおしゃれなスナック。カウンターに落ち着いてママの顔を見あげた瞬間、「えっ」。驚いたことにかれこれ二十年も会ったことのない女性の顔がそこにあった。

なんと40回生の安岡真智子さんではないか。こんな偶然の出会いってあるもんだ。

東京時代は前進座の女優として活躍していた。

「悪女を演じてみたい」―

大きく載った新聞のインタビュー記事など読んで、関東支部の有志で渋谷の東横劇場に応援観劇に行ったことがある。あれは昭和五十年代のことだったか。

その後、風の便りに大阪でテレビドラマやCM出演の仕事をしているとは聞いたが詳しいことは知らなかった。

まあ、懐かしい、という訳ですぐに土佐弁に。

「お客さんがいい方ばかりで助けられゆうがですよ」

今はお店の空間を舞台にお客に夢を売る。

頂いた名刺には「陽気老　大阪市北区曽根崎新地1―7―9エスパス北新地11　7階　B　TEL06―6345―3310」とあった。店名の「陽気老」はどこかで聞いた響きだが、文字通り陽気に老けようということか。歌声響く明るい店内はお客が主役。

どうも「悪女」を演じられるのは、もっともっと老けてからのことかも知れない。

★出版レーダー★

田島　征三（34回生）
「はたけうた」　福音館書店　八四〇円　2006. 09
「しらないまち」　偕成社　一四七〇円　2006. 07
「憲法を変えて戦争へ行こう　という世の中にしないための18人の発言」　岩波書店　五〇〇円　2005. 08

野田正彰（37回生）
「子どもが見ている背中」　岩波書店　一七八五円　2006. 10

柿田睦夫（38回生）
「現代葬儀考」　新日本出版社　一五七五円　2006. 10

塩田潮（40回生）
「「昭和の怪物」岸信介の真実」　ワック　九七九円　2006. 10
「「昭和の教祖」安岡正篤の真実」　ワック　九七九円　2006. 08

黒鉄ヒロシ（41回生）
「伝説日本チャンバラ狂名作時代劇おもしろドキュメント」　集英社　一二六〇円　2006. 06

高山宏（42回生）
「ヴィジュアル・アナロジーつなぐ技術としての人間意識」　産業図書　三三六〇円　2006. 07

坂東真砂子（51回生）
「鬼に喰われた女今昔千年物語」　集英社　一三六五円　2006. 10
「満月の夜古池で」　角川書店　四九九円　2006. 08
「南洋の島語りタヒチからの手紙」　毎日新聞社　一八九〇円　2006. 07
「天唄歌い」　朝日新聞社　一七八五円　2006. 07
「異国の迷路」　ＪＴＢパブリッシング　一二六〇円　2006. 05
「血と聖」　角川書店　一三六五円　2006. 03
「快楽の封筒」　集英社　四七九円　2006. 01

鍋島高明（30回生）
「相場師秘聞　波瀾曲折の生涯」　河出書房新社　二〇〇〇円　2006. 10

ここからは雑誌に掲載されています

公文　俊平（28回生）
「Web2. 0は世界に何をもたらしたか — 対談 梅田望夫×公文俊平」　智場. 107　6–29　2006

森下巌（28回生）
「計測から見た制御」　計測と制御. 45(4)　286–289　2006

野田正彰（37回生）
「戦後日本社会と中帰連」　中帰連. 36　3–10　2006

塩田潮（40回生）
「安倍晋三の実力(最終回)首相への道」　論座. 136　144–151　2006
「安倍晋三の実力(第4回)3割政党の壁」　論座. 135　94–101　2006
「安倍晋三の実力(第3回)拉致との出合い」　論座. 134　126–133　2006
「安倍晋三の実力(第2回)DNAという呪縛」　論座. 133　138–145　2006
「新連載　安倍晋三の実力(第1回)擁立の伏線」　論座. 132　84–91　2006
「FOCUS政治　安倍VS. 福田のレース　秘書体験の影響は」　週刊東洋経済. 6031　152–153　2006
「FOCUS政治　「退任後」めぐる小泉、森の駆け引き」　週刊東洋経済. 6024　118–119　2006
「FOCUS政治　小沢一郎民主党代表　最後の戦い」　週刊東洋経済. 6017　150–151　2006
「FOCUS政治　安倍首相実現で保守革命目指す」　週刊東洋経済. 6011　140–141　2006
「政治　顕在化する政治家の劣化 — 選別と淘汰の機能する社会づくりを」　改革者. 551　36–39　2006
「政界きっての剛腕は、いかに自公体制を攻略するか「ニュー小沢一郎」政権奪取の最終戦争」　プレジデント. 44(12)　122–128　2006

西村繁男（40回生）
「西村繁男氏に聞く　人々が生きた歴史を絵で見る」　歴史地理教育　698　8–15　2006

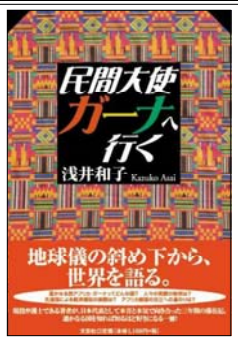
黒鉄ヒロシ（41回生）
「加治将一×黒鉄ヒロシ　坂本龍馬の黒幕、殺した真犯人」　週刊現代. 48(9)　176–178　2006

宮岡等（49回生）
「救急現場における臨床倫理」　Emergency care. 19(5)　449–452　2006
「専門医制度委員会企画(第2回)精神症状把握のための面接」　精神神経学雑誌. 108(5)　533–537　2006

坂東真砂子（51回生）
「壁に囲まれた「自由」」　世界. 753　135–142　2006

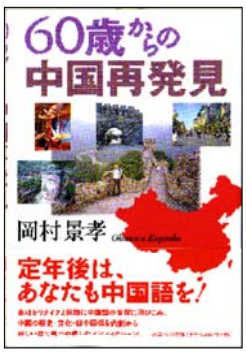
「僕はあの日、鬼になりました」
早稲田実業の斎藤佑樹が筆者に語った言葉である。
老エースが斎藤に伝えたメッセージは。そして、斎藤が老エースに誓ったこととは。
本書は、75年の時空を超えた、感動の甲子園ノンフィクションです。

「ハンカチ王子と老エース」
門田隆将（53回生）
四六判　289頁
本体価格￥１６００
06年11月講談社発行



著者は持ち前の明るさと「よさこい鳴子踊り」の開催などのアイデアを通して灼熱のスローライフの国にとけ込んだ。三年間の体当たりの生活は、肌の色や言葉の違いを越えて世界は仲良くなれることを私達に教えてくれる。一方で「しっかりしなさい外務省」（第四章）と辛口の意見も忘れず、ハチキン魂が発揮されていて小気味いい。

「民間大使ガーナへ行く」
浅井和子（35回生）
四六判　152頁
本体価格￥１１００
06年12月文芸社発行



定年後に中国語を学んだ著者が、新しい日中関係や歴史・文化を見つめ直した一冊。

「60歳からの中国再発見」
岡村景孝（30回生）
四六版　192頁
本体価格￥１２６０
06年7月文芸社発行